〈公募論文〉

ジョン・ロックの自然科学の哲学[1]

田村　均（名古屋大学）

1　はじめに

本論文の目標は、自然科学の知識に関するジョン・ロックの『人間知性論』における基本的立場を明らかにすることである。そのための手がかりとして、ロックは、哲学的装置としての観念説（the theory of ideas）をどのように用いているのか、という問題を取り上げる。以下では、第2節で、この問題を解釈枠組みの転換という形で明確化し、第3節で、この転換をロックの議論に即して正当化する。第4節と第5節では、一七世紀後半イングランドの知識論の文脈から、我々の主張する解釈枠組みが歴史的に妥当なものであることを示す。さらに、第6節で、一見ロックの議論の混乱に見えるものが、実は、解釈者が暗黙裡に持ち込んだ解釈上の先入見に由来しており、ロック本人に混乱は無いことを示す。最終節では、ロックの基本的立場が確認され、我々の解釈の意義が明らかになる。

2　解釈枠組みの転換

ロックは、心の作用の直接的対象は観念である、とする観念説の考え方を、哲学的分析の方法として採用した。そして同時に、感覚に与えられる単純な諸観念は、個々の事物の実在性を示している、という感覚主義的な実在論の立場もとった。だが、心的内在である感覚の単純観念が、外なる実在を表示する、という主張は、哲学史的常識に従えば、そう簡単には成り立たないように思われる。例えばトーマス・リードは、ロックを論じて「観念の教説は、外なる物的世界の実在を証明することを、必要にすると同時に困難にもする（Reid［1969］p. 154）」と

述べた。現代ではジョナサン・ベネットが典型的にこの見方を踏襲し、「ロックは客観的世界を、つまり『実在の物』の世界を、我々の到達できない知覚のヴェイルの向こう側に押しやる(Bennett [1971] p. 69)」と述べている。

リードやベネットは、明らかに、心の内なる表象からどのようにして外なる実在へ到達できるのか、という問題を、ロックの中に読み込んでいる。[2] ところが、後述のように、ロックにとっては、心の内と外ではなく、むしろ、個別的事実認識と普遍的で理論的な認識との関係が問題だった。ロックは、観念説を、〈心の内から外へ〉という問題を考察するためではなく、〈個別的事実から理論へ〉という問題を考察するために用いている。ロック解釈の枠組みは、ロック自身の意図に即して、〈心の内から外へ〉という問題図式から、〈個別的事実から理論へ〉という問題図式へ転換さるべきである。以下では、まず、『人間知性論』から実例を取り、リード－ベネット型の解釈枠組みが不適切であり、我々の提起する解釈枠組みが適切であることを示そう。

3　ロックの問題――『人間知性論』2-23-29 と 2-4-6

引用1「結論すると、感覚は不可入の延長した実体が存在することを確信させる。内省は、思考する実体が存在することを確信させる。経験は〔そういう〕存在者の実在を保証している。……経験は、この両方の実体の明晰な観念を、いついかなる時でも、我々に供給している。しかし、これら固有の源泉から受け取られる観念を越えては、我々の機能はとどかない。我々がこれらの実体の本性、原因、様態（Nature, Causes, and Manner）をさらに探究しようとしても、延長の本性を思考の本性より明晰に知覚できるわけではない。……ここからして、感覚と内省を通じて受け取られる単純観念が我々の思考の限界をなしているということは確からしいと私には思われる。この限界を越えては、心は、どんなに努力しようと、一歩たりとも進むことはできない。これらの観念の本性や隠れた原因（hidden Causes）を探ろうとしても心は何の発見もできないのである。[3] (2-23-29, 312)」

この箇所は、リード－ベネット型の解釈によると、次のように読まれる可能性がある。

――心的内在である単純観念を越えては、心は一歩も進むことができないのだから、私たちは心の外にある実在には決して到達できない、とロックは言っていることになる。それなのに、冒頭では、経験を通じて物体や精神の実在性が保証される、とも言っている。ロックの議論はひどく混乱している。

しかし、引用1と同じ主張を具体的に展開している次の引用2の箇所と突き合わせてみると、右のようなリード－ベネット型の解釈の不適切なことが分かる。

引用2　「誰かがこの固体性（solidity）とは何かと問うなら、私はその人に自分の感覚から教えてもらうよう勧める。火打ち石とかフットボールとかをその人の両手の間に持たせて、自分の両手を合わせるようにさせてみよう。そうすれば、その人は理解するだろう。……我々の持っている単純観念は、経験が我々に〔思考や固体性や延長について〕教えるものである。かりに、経験を越えて、言葉によって、単純観念をよりいっそう明晰にしようと努力しても、我々は盲人の心の中の闇を語ることで晴らし、光と色の観念を説得してもたせるのと同じような失敗に終わるのである。（2-4-6, 126-7）」

この引用2は、単純観念が我々の認識機能の限界だ、という引用1の主張の具体的な例示として読むことができる。フットボールを両手の間に挟んで、ぐっと押してみる。すると、我々は、フットボールが手のひらの動きに抵抗するのを感じる。ロックの言いたいことは、この〈抵抗の感じ〉こそ、我々が固体性について明晰に把握できる極限だ、ということである。単純な所与としての〈感じ〉を〈越えて〉、言葉でもってさらに固体性をより明晰に捉えようとしてもうまく行かない。引用2は、そう言っているのである。

もとより、いかに〈抵抗の感じ〉を明晰に経験しようとも、この〈感じ〉が物的実体の本性から因果的に帰結してくる様態を、我々の感覚機能が、教えてはくれないことは明らかである。「実体の本性、原因、様態をさらに探求しようとしても〔引用1〕」そこまでは我々の機能はとどかない。ところが他方、「言葉によって、単純観念をよりいっそう明晰にしよう〔引用2〕」とし、「実体の本性、原因、様態〔引用1〕」について言葉をつらねても、感覚の〈感じ〉の明晰さを越えられないし（引用2参照）、何の発見も得られない（引用1参照）のである。

こう突き合わせてみれば、引用1が少しも混乱を含まないことが分かる。個別的事実の感覚的経験を〈越えて〉、事実の因果的把握にただちに達するようには、人間の認識機能はできていない。そういう意味で、単純観念が我々の思考の限界なのである。感覚は、事物が実在することを教えている。だが、事実の因果的説明は、何らかの理論体系のもとでしか成立しない。それゆえ、認識論上の困難は、事実から理論へ到る途中にある。心の内から外へ越え出る途中にあるのではない。ロックの図式は、原則として、〈心の内から外へ〉ではなく〈個別的事実から理論へ〉なのである。

以下では、さらに、自然の事実を言葉で説明するということが、一七世紀後半のイングランドで持っていた含意を検討し、

歴史的文脈を補って以上の解釈を補強する。

4　ロックと実験的自然学（1）——言葉と事実

一七世紀後半のイングランドは、近代の実験的自然科学が形成される重要な舞台だった。ロンドン王立協会は実験的自然学者の学会であり、ロックもそのメンバーだった。この協会の一種の公式声明として、一六六七年に刊行されたトーマス・スプラットの『ロンドン王立協会の歴史』の一節を見てみよう。

引用3　「ロンドン王立協会の人々は、荘厳な法典や華やかな式典によってではなく、堅実な実践と諸々の実例によって、学問（philosophy）における諸改革をしっかり打ち立てることに取りかかった。華麗できらびやかな言葉（words）によってではなく、事実の産出という、反論不可能で効果的な沈黙の論証によってそれを行なってきたのである。（Sprat［1959］p. 62）」

ベーコン以来、実験的自然学の信奉者たちは、スコラ的な問答や言葉の定義による自然の研究が有害無益であると信じ、本当に自然を知り、それを有効に支配するためには、実験や観察に従事して、眼や手を使って勤勉に働かなければならない、と考えた。ロンドン王立協会の自己理解では、自分たちのやってきたことは、言葉をもてあそぶことから学問を解放し、事実と実例の産出という堅実な実践と結びつけることであった。これが当時の実験的自然学者たちの共通理解である。

引用4　「実験哲学は、人々を実地の仕事（works）に向かわせるという点で、彼らが思考を問答に空費するのを妨げると考えてよい。（Sprat［1959］p. 341）」

実験哲学の立場から見れば、言葉に拘泥することは時間の空費にすぎず、言葉がもたらす対立や困難は、実地の作業を通じて解消できる。言葉ではなく実地作業を、という態度は、一七世紀イングランドの著作家にひろく見られる（Jones［1982］, Formigari［1988］参照）。ロック自身も、『人間知性論』第3巻の言語論では、事物の本質を言葉で定義することによって自然学が成り立つとみなすスコラ学派の態度を、厳しく批判した。

この文脈に置けば、言葉で単純観念を説明することはできない、という先のロックからの引用2の主張は、次のような趣旨になる。手のひらにフットボールからの抵抗を感じるという経験は、ボールを押してみるという小さな〈実験〉の結果である。ボールを押すという〈仕事〉は、抵抗の感じを得て終了する。この〈仕事〉の結果として得られた〈抵抗の感じ〉という単純観念を、何らかの〈言葉〉がより明晰にする、ということはありえない。要するに、これはスコラ的自然学に対抗する実験的

自然学の主張なのである。

「観念」というロックの術語を、同時代の自然学方法論の文脈に置いて解釈すれば、言葉ではなく観念こそ外界を表現する、ということになる。リード－ベネット型解釈の暗黙の前提、〈観念は心的内在だから外的対象からは原理的に切り離されている〉という哲学史的通念は、当てはまらない。以下では、さらに、先の引用1の「実体の本性、原因、様態」といった言葉の含意を、歴史的文脈の中で明らかにしよう。

5　ロックと実験的自然学（2）——事実と因果

ロックの臨床医学上の師、トーマス・シドナムは、次のように述べている。

引用5　「高慢にも、人は、……事物の隠れた原因（the hidden cause）をどうしても見破りたいと思い、自然の働きについて我流の原理を置き、公準を打ち立てるのが常であった。そして、自然が、というよりも本当は神自身が、人の作った公準の命ずる法則に従って進んでいくと期待して、結局、全く得るところはなかったのである。（'De Arte Medica', Dewhurst［1966］p. 81-2）」

これは、今までの学問が、地道な進歩を遂げてこなかった理由を指摘している箇所である。「隠れた原因」という言葉は、ロックからの引用1の末尾にも見えている。「隠れた原因」を追求することは、結局、勝手な原理で自然を推断しては思弁と論争にふけり、一歩も学問を進ませることのなかった旧来のスコラ学派のやり方である。シドナムの考えでは、そもそも世界の実在的構造の完全な因果的把握は、神自身にしかできない。

引用6　「人の狭く弱い能力は、目に見える外的な原因が産み出す諸結果の観察と記憶以上には届かないであろう。……この世界の巨大で興味深い構造、つまり全能なる存在の行なった仕事は、これを創った知性以外によっては完全な理解はできない……（'De Arte Medica', Dewhurst［1966］p. 82）」

これを解剖術という具体的な問題に即して述べると、次のようになる。

引用7　「確かに、我々は、胆汁と尿とがそれぞれ肝臓と腎臓から出てくるということを見るし、胆汁と尿が肝臓と腎臓の作るものであることも知る。だが、そのことによって、そういった臓器の働きの原因（cause）や様態（manner）に一歩でも近づいたわけではないのである。（'Anatomie', Dewhurst［1966］p. 87）」

解剖学者は、体液を臓器が作っているという観察可能な事実にしか到達できず、臓器の働きの原因や様態は見えはしない。これは、物体と精神の働きの事実を、経験を通じて知ったとしても、それらの働きの原因や様態に近づくわけではない、という引用1におけるロックの言葉と同じ考え方である。[3]

このように、一七世紀の実験的自然学者にとって、実在の本性や原因や様態への言及は、観察可能な範囲を越えてしまえば、空虚な思弁や論争にかまけることとほぼ同義であった。ロックも、スコラ的実体形相論はもとより、自分の受容した理論である微粒子説（the corpuscular hypothesis）ですら、個別的事実の観察を越えて、絶対確実な知識を与えるとは考えなかった（4-3-25, 4-12-10, また、第3巻の随所、参照）。

それゆえ、人間が越えられないのは、個別的事実の観察と普遍的で理論的な認識との間を隔てる境界なのであって、心の内と外を隔てる境界ではない。ロックは〈個別的事実から理論へ〉の図式を念頭に置いて自然認識の問題を考察している。西洋近世哲学史の通念である〈心の内から外へ〉の図式をロックに読み込むことは的外れなのである。

しかし、以上のような解釈枠組みの転換が歴史的に見て妥当だとしても、感覚の単純観念の実在性という主張そのものが成り立ち難いという懐疑論の疑念は、容易に払拭されないだろう。次節では、この疑念が、〈心の内から外へ〉という通念的図式に我々が深く影響を受けていることに根ざしており、ロックの思考とは無関係であることを示す。

6　観念説と感覚主義的実在論

私見では、観念説の最も基本的な主張は次の二つである。

（イ）【観念の直接性】　心の作用の直接的対象は観念、すなわち心的内在である

（ロ）【観念の表現性】　ある観念は真実在を表現している

この二つに、さらに、どの観念が真実在を表現しているのかを定める原理を付け加えれば、認識と存在の交わる点が定まる。そこで、ロックにならって、

（ｘ）【感覚主義的実在論】　感覚の単純観念は真実在を表現している

という原理を付け加えてみる。まず確認すべきことは、感覚主義的実在論（ｘ）が、観念の直接性（イ）と矛盾するわけではない、ということである。（イ）（ロ）（ｘ）を続けて読んでみれば、そのことは明白である。（イ）心は観念のみを直接的対象とし、（ロ）観念のうちのあるものは真実在を表現しているのだが、（ｘ）感覚の単純観念がそういう観念である、とい

うだけのことである。

ロックが論点先取をしているような感じがするならば、その理由は、我々が、

（y）【観念説の方法論的制約】観念のみに着目して、真実在を表現している観念を選び出せ

という方針を、暗黙のうちに、観念の直接性（イ）と同時に受け入れるからである。

（イ）の系として観念説の方法論的制約（y）を受け入れることは、容易に正当化できる。（y）の後半の〈真実在を表現している観念を選び出す〉という仕事も心の作用だから、この仕事は当然観念のみを直接的対象とするのでなければならないのである。

そこで、ロックは感覚主義的実在論（x）と観念説の方法論的制約（y）のすりあわせをどうやったのか、という問題が残る。この問題は、要するに、感覚の単純観念を注視することだけから、感覚の単純観念の信頼性を確立できるか、ということである。

ロックは、まったく簡単に、想起や想像や夢の観念と感覚の単純観念との信頼性の相違は自明である、と考えた。

引用8　「誰も自分が見たり触ったりするものの存在を絶対確実としないほど、まじめに懐疑的であることはできないと私は思う（4-11-3, 631/20ff.）」

実験的自然学者にとっては、ことはこれでおしまいだった。だが、いわゆる〈感覚への懐疑〉をこういう立言で一掃することはできない。そこで、ロックは全く別のタイプの議論を提出する。そもそも、人間の認識機能は、事物について、あらゆる

理　想　社

最新刊

現象学的化粧論

おしゃれの哲学

石田かおり著　定価2300円

化粧の意味、歴史、現在、未来を現象学的に考察。本邦初の本格的化粧論。

好評発売中

「白雪姫」とフェティシュ信仰

石塚正英著　定価2100円

理想哲学選書8

永劫回帰思想と啓蒙の弁証法

三富　明著　定価2200円

実存思想論集

Ⅸ　ニーチェ

Ⅹ　詩と実存

実存思想協会編　定価各2000円

カント全集第13巻

歴史哲学論集

小倉志祥訳　定価12600円

現代文明と人間

渡邊二郎編著　定価2900円

注解

ガラテヤの信徒への手紙

民族宗教から世界宗教へ

量　義治著　定価2600円

懐疑・言語・真理

―ヘレニズム時代の哲学―

笹谷　満著　定価4300円

『理　想』

年2回発行　定価2000円

最新刊　第656号

特集

転換期の芸術の哲学

定価はすべて税込

〒171 東京都豊島区千早4-38-11

TEL03(3958)4304 FAX03(3958)9153

疑いを免れた包括的知識を得るためにあるのではなく、人間の自己保存と生存の役に立つためにある。感覚に対する全面的な懐疑は、我々の生存の役に立たないから、それは実践的に不適切なのだ、とロックは考えた（4-11-8 参照）。たとえば、蠟燭の炎に指を突っ込んで激しい痛みを感じたとき、その炎の実在性を疑ってかかるのは、生きる上で不適切な態度である。

引用9 「〔感覚の証拠は〕快苦、すなわち幸福と不幸と同じだけ我々にとって確実なのだから、我々の望みうる限りの大きさなのである。幸福と不幸を越えては、我々は、それを知るなり、それになるなりしたいような関心事を、少しも持っていない。（4-11-8, 635/6ff.）」

感覚の信頼性を実践に即して述べるこの論法は、初期草稿以来のものだが（Locke［1990］p. 21, p. 147 参照）、観念説の方法論的制約に沿って立てられてはいない。だから、この世での我々の生の全体を考察する際に、ロックは、観念説の方法論的制約を優先するのか、感覚主義的実在論を優先するのか、という哲学的原理の選択を迫られてもよかったはずだ、とは指摘できよう。おそらくロックは躊躇せずに、感覚主義的実在論を優先する、と答えたであろう。ロックは、宗教的・倫理的な原理によって、感覚主義的な実在論の主張が、観念説の方法論的制約よりも《強い》主張として、天降り的に導入できる、と見なしていた。ロックの哲学体系はそのようにできている。

引用10 「私たちと、私たちの周囲のすべての事物の無限に賢明な考案者は、私たちの諸感覚、諸機能、諸器官を、生活の便宜と、この世での私たちの為すべき仕事とのために、うまく適合するようにした。私たちは、感覚によって、事物を知り、識別することができる。そして、事物をよく調べて、それらを目的に応じて使い、私たちの生活の差し迫ったいろいろな必要事に当てることができる。私たちは、十分鋭い洞察力を持っており、事物の賛嘆すべき仕組みや、その素晴らしい効果を見抜き、創造主の知恵と力と善性を賛美することができる。こういった知識こそ、私たちの現在の条件によく適っており、私たちは、こういう知識に達するための機能を欠いてはいないのである。（2-23-12, 302/10ff.）」

観念説の方法論的制約をとことん守らねばならぬ、という考え方は、〈心の内から外へ〉の図式で認識論的問題を考えるべきだ、という信念に等しい。そのような信念を持つことは特に禁止されはしないが、ロックとは違うやり方になる。ロック本人は〈個別的事実から理論へ〉という図式をとった。この態度は、感覚主義的実在論が観念説の方法論的制約よりも優先する、と認めることに等しい。すでに確認したように、この態度は矛

盾をもたらすわけではない。したがって、ロックの考え方に内部的な不整合はない。そこに不整合を見てしまうのは、解釈者が〈心の内から外へ〉という図式を暗黙のうちにロックに押しつけているからなのである。

7　むすび

ロックの自然科学の哲学は、実験と観察から出発し、人間にとって有用な諸々の知識を獲得しよう、という同時代のベーコン主義の学問の理念に沿っている。デカルトに由来する観念説は、この理念に従属し、これを展開するための装置であった。解釈枠組みの転換を通じて、我々は、ロックのこの立場の整合性を明らかにできたと考える。

最後に、この枠組みの転換から得られる洞察を三つ挙げておこう。

第一に、感覚主義的実在論にもとづく観念説は、個別的事実認識の、理論からの独立を成立させる。一般に、観念は、心の中の直接的対象として、概念的演繹の手間なしに直知できるとされる（4-1-4参照）。そこで、感覚の単純観念も、およそ概念枠とは独立に同定できることになり、こうして、理論体系とは切り離して実在的で自明な事実認識が得られることになる。観念説がベーコン主義的科学の基礎づけに寄与するのは、この特性を通してである。

第二に、ロックと懐疑論との関係が明かになる。〈個別的事実から理論へ〉という図式上では〈理論への懐疑（理論の決定不全性）〉が問題となる。また、感覚的受容の信頼性は、感覚は疑わしいという〈感覚への懐疑〉のような大ざっぱな形ではなく、〈データを採取する技術や装置が十分信頼できるか〉という精密で真に科学的な形で問われる。ロックは、理論体系としての自然学は蓋然的水準にとどまると見て〈理論への懐疑〉

ミネルヴァ書房

西田幾多郎
—その思想と現代—
小坂国継著　彼の完成期の哲学形成を、現代の哲学的状況をふまえ比較思想的観点から考察する。没後半世紀を経たいま、表層的な西田哲学評価を超えその思想的核心に迫る。三〇〇〇円

北一輝
—転換期の思想構造—
岡本幸治著　「ファシスト」「超国家主義者」等のレッテル貼りに終始した戦後イデオロギーの虚妄性を指弾し、彼の思想構造に肉薄。戦後思想の再考を促す北一輝論の決定版。三五〇〇円

南原繁と長谷川如是閑
A・E・バーシェイ著　宮本盛太郎監訳◉国家と知識人・丸山眞男の二人の師　批判的姿勢をとりつつ国家で生きる苦難を南原繁、長谷川如是閑の人生を通して例証。五〇〇〇円

〒607 京都山科局私書箱24
℡075-581-0296　FAX075-581-0589
税込・宅配可。振01020-0-8076

を受け入れたが、〈感覚への懐疑〉は問題外と見なし、自然探究の技術的な洗練を重視した。

第三に、微粒子説という理論体系へのロックのコミットメントを適切に解釈できる。近年のロック解釈では、このコミットメントを、ロック本人の留保に反して強く読み込み、ロックを今様の科学的実在論者になぞらえる傾向が見られる。(5) だが、我々の解釈では、ロックの実在論は、感覚の水準で十分整合的に主張され得るから、微粒子説への形而上学的コミットメントを、ロックに無理強いする必要はなくなるのである。

注

(1) 本論文では、近代以降の自然研究全体を意味するときは、「自然科学」と言い、ロックの時代の自然研究を意味するときは、「自然学」と言うことにする。

(2) 筆者の知るかぎり、リードとベネット以外のほとんどの解釈者も同じ読み込みをしている。この読み込みをするかぎり、ロックは混乱した哲学者に見えてしまう。

(3) Locke［1975］の引用箇所は（巻―章―節、頁／行）と表示する。行番号は長い引用では省いた。訳文は基本的に拙訳だが、岩波文庫の大槻春彦訳を参照させていただいた。

(4) これらのシドナムの論文草稿は、ロックが親しく教えを受けた一六六七～七二年の期間に書かれた（Dewhurst［1966］p. 34）。『人間知性論』草稿ABも一六七一年に書かれている。

(5) この傾向はMandelbaum［1964］が導入した。なお、Mandelbaum［1964］は、ロックとベーコン主義との結びつきに十分留意し、その点で均衡のとれた解釈を与えている。

参照文献

Bennett, Jonathan, ［1971］, *Locke, Berkeley, Hume*, (Oxford: Oxford Univ. Pr.)

Dewhurst, Kenneth, ［1966］, *Dr. Thomas Sydenham* (*1624–1689*) : *His Life and Original Writings*, (Berkeley and Los Angeles: Univ. of California Pr.)

Formigari, Lia, ［1988］, *Language and Experience in 17th-Century British Philosophy*, (Amsterdam/Philadelphia: Benjamin Pub.)

Jones, Richard F., ［1982］, *Ancients and Moderns*, (New York: Dover Publ. ［orig. pub. 1961, by Washington Univ. Pr., St. Louis］)

Locke, John, ［1975］, *An Essay concerning Human Understanding*, (Oxford: Oxford Univ. Pr., ［orig. pub. London, 1690］)

Locke, John, ［1990］, *Drafts for the Essay Concerning Human Understanding and Other Philosophical Writings, Volume 1, Drafts A and B*, ed. by P. H. Nidditch and G. A. J. Rogers, (Oxford: Oxford Univ. Pr.)

Mandelbaum, Maurice, ［1964］, *Philosophy, Science and Sense Perception*, (Baltimore: The Johns Hopkins Pr.)

Reid, Thomas, ［1969］, *Essays on the Intellectual Powers of Man*, (MIT Pr. ［org. pub. 1785］)

Sprat, Thomas, ［1959］, *The History of the Royal Society of London*, edited with critical apparatus by J. I. Cope and H. W. Jones, (St. Louis: Washington Univ. ［orig. pub. London, 1667］)

本論文は、一九九五年度科学研究費補助金一般研究（c）課題番号07801002による研究成果の一部である。

individual soul. This interpretation suggests that Aquinas rejects the Neo-Platonic scheme of epistemology, which was current among the Islamic philosophers. On the other hand, he takes Platonic position about the subsistence of soul. This ambiguous attitude to the Platonism cannot be explained in Platonism-vs-Aristotelianism sheme. I have tried to clarify that the Aquinas' basic position, recognized throughout this ambiguity, is his emphasis on the human individuality.

John Locke's Philosophy of Natural Science

Hitoshi TAMURA

The aim of this paper is to show the consistency of Locke's philosophy of natural science. Most of Locke scholars have wrongly assumed that his way of ideas contains an intrinsic difficulty about the reality of the external world. This paper makes it clear, however, that Locke deals with epistemological problems in terms of the distinction between facts and theory, not between the internal and the external. Locke does not admit that human beings can obtain a justified universal *theory* about the physical constitution of the world. But he happily affirms that they can be justified, by means of "simple ideas of sensation", in believing in particular *facts* about the external world. Locke's conception of science is essentially Baconian and his way of ideas, a Cartesian inheritance, is shaped up within his Baconian scheme.

„Realität" und „objektive Realität" bei Kant
——Kraft als Realität——

Masayuki INUTAKE

Vor und nach seiner Periode der Kritik erhielt Kant durchgehend den traditionellen Sinn von Realität. Nach dem bedeutet die Realität die Wesensbestimmung des Dinges, das außer dem Verstand existiert.

Anderseits bestimmt Kant den Sinn von der objektiven Realität der Vorstellung als die Bestimmtheit der Existenz des Objekts, das durch diese Vorstellung vorgestellt wird.

Durch diese Erkenntniskritik fragt Kant nach der Realität des Gegenstandes der Erfahrung, d. i. dem Wesen der Natur, und antwortet, daß es die Kraft ist. Diese Kraftbegriff wird in der „Phänomenologie" der *Metaphysischen Anfangsgründen der Naturwissenschaft* als die Bedingung der Möglichkeit der Beschreibung der objektiven Bewegung des Körpers, d. i. der Erfahrung der Bewegung dargestellt.